
ミラージュ・ワールド（２） 狂花のハーツ

姫反 アロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラージュ・ワールド（2） 狂花のハーツ

【Nコード】

N2941H

【作者名】

姫反 アロ

【あらすじ】

『ミラージュワールド』開始から1年。ゲーム内での死^{プレイヤー}現実世界の死ではないことが判明すると、途端にPK行為を行うものが増加した。ユウトたちは『閃光ジャック』と呼ばれるPKに襲われるが……。

まえがき。

今作MW(2)はMW(1)の続編です。

そのため、前作を読まないとなったく意味がわからないので(前作を読んでもそのかぎりではないかもしれませんが)、未読の方は前作からお読みください。

+ミラージュワールド+

MMWRPG(多人数参加型異世界ロールプレイングゲーム)。
剣と魔法でモンスターを倒す王道RPGだが、フィールドとプレイヤーのアバダーが実際に存在する。

登場人物紹介

+ユウト+

・年齢

MW(1)時 14歳(中2)

MW(2)時 15歳(中3)

・武器

クレイモア

高地人剣、角弓

・主人公。

弓道部のエース。

初期状態で秘奥義を習得済みといく異例のプレイヤー。

+ ハルカ +

・ 年齢

M W (1) 時 1 5 歳 (中 3)

M W (2) 時 1 6 歳 (高 1)

・ 武器

杖 槍

・

ヒロイン。

白兵戦能力特化型魔術師

+ ソウヤ +

M W (1) 時 1 9 歳

M W (2) 時 2 0 歳

・ 武器??

ハルカの兄。

ギルド『月姫の剣』のリーダー。
唯一レベル40に達している。

1・放送室の二人(1)(前書き)

終末連続更新、一週間に1章以上更新。

1・放送室の二人(1)

「卒業祝いにパフェが食べたい」

突然晴佳から掛かってきた電話で、彼女はそんなことを言った。

「じゃ、駅前で待ってるから。11時までに来ること」

「……」

ちなみに彼女が中学を卒業したのは1ヶ月前のことである。既に高校生としての生活を始めているのに、なにをいまさら祝いだという話である。

現在の時刻は10時45分。

急いで出ればギリギリ間に合うか――。

「しゃーない」

…

「後輩にパフェ奢らせる先輩ってどうなんですかね」

そんな皮肉を口にしてみる。

「いいじゃない。パフェの一つや二つ。あんたそれでも男？」

「……またそれですか」

優斗は小さいため息を付いた後、イチゴを口に放り込んだ。

「で、先輩学校はどうです？」

「ん？ まあ、特には。――そういえば、またやられたって」

先輩は突然話題を切り替えた。

「――また？」

「ええ。もう8人目よ」

…

『ミラージュワールド』が始まってから1年半が経過した。

優斗が晴佳と出会った1カ月後。ゲーム始めての『死亡者』が出た。あるギルドのメンバーだった男は、ダンジョン攻略でHPが0になり、死亡した。だが、実際の世界では彼は生きていた。ただし、ミラージュワールドに関する記憶を全て失った状態で。

てつきりミラージュワールドで死ぬと、現実の世界でも死ぬと誰もが思っていたため、男が生きていると分かったときはかなり驚いた。

だが、冷静に『説明書』を読み返して見れば、『死ぬこともある』としか書かれておらず、どこにも『現実世界でも死ぬ』とは書かれていなかった。

ただ、ミラージュワールドに関わる記憶の全てが消され、再びミラージュワールドにログインすることも出来なくなる——これがミラージュワールドにおける死だ。

また、男の仲間の証言により、HPゲージが0になっても死ぬわけではないことが分かった。

ミラージュワールドでは、HPゲージがあるうちは、斬られようと、焼かれようと、HPが削れるだけで肉体は傷つかない。また痛みも半分以下になる。だが、HPゲージがなくなった後はそうは行かない。斬られれば体は真つ二つ、焼かれれば火傷を負う。

男もHPゲージが0になった後、敵に噛み付かれて出血多量で死んだそうだ。

つまり、現実では生きていても、一回『死』というものを体験することになるのだ。

また、ミラージュワールドで死んでも現実では生きている、ということが分かると、いわゆるPK——プレイヤーキラー行為を行い、アイテムとデイル（通貨）を奪うものたちも現れ始めた。

そして、今ミラージュワールド内最大の脅威が『閃光ジャック』だ。既に8人のプレイヤーが殺されている。

彼に襲われて唯一生き延びたものが現れ、その存在があらわになった。

生き残ったプレイヤーの話に由れば、突然現れ、一太刀目でHPゲージをゼロにされ、二太刀目で首が飛ぶらしい。

一太刀でHPゲージをゼロに出来るとなればかなりの使い手だろう。8人目の犠牲者のレベルは10だったらしいが、HPゲージを一撃でなくすとなると、レベル30でも難しい。

優斗は、それだけの實力を持つプレイヤーは一人しか浮かばなかった。現在、全プレイヤー中、唯一レベル40達している、間違いなく最強の双剣使い。

もっとも、彼が閃光ジャックという可能性はゼロだが。

放送室の二人(2)

「優斗くん。放送室一緒に行こう?」

教室に戻ってた優斗に一人の女生徒が話しかけてきた。

「あ、うん。三矢さん」

三矢 巴。ポニーテールと黒のハイソックスが特徴的で、常に周りに笑顔を振りまく明るい少女だ。その性格から、男女を問わず友達も多い。

優斗も、女子特有の裏表が無く、接していて安心させられる彼女が好きだった。無論、それは『love』の好きではなく、『like』の好きだが。

2人は同じ3年A組で、放送委員だった。今日から1週間、2人は昼休みの放送を担当することになっている。といっても、適当に音楽とお知らせを流すだけの仕事だが。

「CD持ってこれるだけ持ってきたんだあ」

廊下を歩きながら、彼女がバックを右手で叩いた。

「助かるよ。俺が選曲したらゲームの主題歌ばっかになっちゃうからさ」

優斗は笑いながらそう言った。

「優斗くんRPGが好きなんだよね? 実は私も最近RPGハマってるんだ」

「え、三矢さんが?」

「うん。多人数参加型のなんだけど」

「へえ、何てタイトル?」

「それは秘密」

と、巴は放送室の扉を開けた。

「秘密つて。隠さなくても良いじゃん」

「へへ。まあちょっと訳ありだねー。あたし結構強いからさ。引かれそうだしね」

訳あり……か。その点、『ミラージュワールド』のプレイヤーは訳ありだよな。多分彼女の訳ありの比じゃない。

巴はマイクの電源を入れた。

「これから、昼の放送を始めます。今日は音楽鑑賞です」

今日『は』音楽鑑賞と言っているが、少なくともここ3年間はずっと音楽鑑賞だ。

巴がボタンを切り替え、CDの曲を流し始めた。

この後は特にすることがない。放送委員の仕事は1年に数回、1週間の放送を行うだけで、それも最初と最初の挨拶をするだけで後は音楽を流すだけの楽な仕事だ。そのため一番人気が高く、例年どのクラスもくじ引きで選ばれる。だから男と女がなるということも珍しくは無かった。

「あ、優斗君、今日さ。マドレーヌ焼いてきたんだけど、食べない？」

「え？」

と、巴はバックからウサギがプリントされた箱を取り出した。その中には小さめのマドレーヌが6つ入っていた。

「貰って良いの？」

「うん。どうぞ」

マドレーヌを一つ受け取り、優斗はそれをパクリと口に入れた。

「これすごいおいしいよ。あれ、調理実習で作ったのより数倍おいしい」

「へへ。ちよつと自信あつたんだー」

優斗は、可愛い子は料理が出来ないという等式を脳内から抹消した。

「本当はもっと凝ったもの作りたかったんだけど、時間が無かったからさ」

「うっん。十分だよ。これ」

優斗は早くも二つ目に手を出した。

「全部食べていいよ。でも、先にお弁当食べなよ。お腹いっぱいに

なっちゃう前に」

「ああ、大丈夫。オニギリだから。最近お弁当作るのが面倒くさくて」

「優斗君自分でお弁当作ってるんだっけ」

「まあね。おばさん忙しいから。去年までは弟の分が必要だったけど、小学校は給食だからさ。自分の分だけ作るのめんどくさいんだよね」

「そっかー。でも優斗君料理出来るんだよね。食べてみたいなあー。優斗君の手料理」

「はは。そんなに上手くないからさ。止めといたほうがいいよ」

…

クラスに戻ると、何故か、いきなり数人の男子に囲まれた。

「優斗——まさかそんなに仲良かったなんて——」

「は？」

「いやあ。お前、気がついてないかもしれないけど、お前等の会話、全校中が聞いてたぜ」

「……は？」

「だから、お前が三矢さんの手作りマドレーヌを貰うあたりの会話、全校生徒が聞いてたぜ」

「……冗談だろ？」

一気に血の気が引くのを感じる。

「本当だよ。皆聞いている。調理実習より数倍おいしいんだもんな」

「……」

引きこもりたい。

ボタンを押し間違えていたのだろうか。

恥ずかしすぎる。ていうか絶対明日上履きに画鋐が入ってるよな……。

「お前、本番のときはちゃんと電源切れよ？ 先生に捕まっちゃう

「からな」

「待て！ 違っだろうが！ 俺はただマドレーヌを食べただけで…」

…

優斗は、午後の授業で先生に散々からかわれ、激しくブルーになっていた。「ああ——スイッチ押し間違えてたみたいだね。ごめん」

巴は手を顔の前で合わせて謝っていた。

「いや、俺は別に良いんだけどさ。三矢さんのほうが問題じゃない？ なんか変な噂流れそうだし」

「はは。別にいいよ。それくらい。でも次からは気をつけないとね」
「そうだね」

「でさ。優斗くんアップルパイ食べれる？」

「え、あ、勿論食べれるけど」

「じゃあ明日はアップパイ焼いてくるね」

「え？ 悪いよそんな。今日もマドレーヌ貰ったし」

「趣味だから。誰かに食べてほしいし。できれば食べて」

「……じゃあ、ご馳走になろうかな」

「うん。じゃあ、またね！」

「またね、三矢さん」

2 プレーヤーキラー

夜。ユウトはいつものように、ランニングしてくるといって家を出で、そのままミラーージュワールドにログインした。

メニューから、転移を選び、行き先を『C地区スクエア』を選択した。

スクエアは、通常の『地区』とは別の空間で、すべてのセーブポイントから転移できる。

スクエアには各種ショップは勿論、ゲームなどが楽しめる娯楽施設や、情報交換が出来る酒場などがある。

各地区のスクエア間は転移で簡単に行き来でき、自分が来たセーブポイント以外のセーブポイントに転移することもできる。つまり、スクエアを経由すれば、どんなに遠い地区でも一瞬で移動できる。

また、デイルを現実の世界のお金に変える換金所もスクエアにある。

換金所で手続きをすると、24時間以内に現実の銀行に匿名でお金振り込まれる。ちなみに、換金所が開くのは1カ月に1回だけだ。まあ換金所の中にはいくらでもスペースがあるので、現実の銀行とは違い、待ち時間はほとんどない。

ユウトは、ハルカと1週間に2回パーティを組んで攻略をしている。

いつもの待ち合わせ場所、アイテムショップが見えてくる。

そこには既にハルカの姿があった。

「こんばんわ、先輩」

「……」

なぜか厳しい顔でこちらを見つめてくるハルカ。

「……先輩？」

「マドレーヌ、おいしかったんだよねえ？」

「……え？」

「聞いたわよ。マドレーヌ『あーん』って、食べさせてもらってたって」

……待て。おい。おかしいだろ。何で先輩がそれを知ってるんだ。しかも微妙に事実とは変わってるし。

「してませんって！ 確かにマドレーヌはご馳走になりましたけど……それに何で先輩が知ってるんですか！？」

「別にー。風の便りで聞いただけよ。それにしても、大胆よねー」
今日の先輩おかしい……。

「まあ良いわ。早く行きましょう」

トコトコと歩いていくハルカ。

ユウトはそれを慌てて追いかけた。

…

「それにしても物騒ですよ。PK」

「そうね。でもあたしは何の心配も要らないねー。当然ユウト君が守ってくれるだろうし」

真顔でそんなことを言われる。

「まあ、そりやできれば守りますけど」

「皆口グインを控えてるみたいね。いつも賑わってる酒場にもほとんど人が居なかった」

「早いとこ何とかしないと、最近モンスターも増えてきてるし」

「あ、ちよつとアイテムショップ寄っていい？ 強化結晶がもう残り少ないんだ」

「うん。じゃああたしちよつと掲示板見てくるわ」

アイテムショップに入って、目的の強化結晶ラインフォースメント・クリスタル以外にも、回復結晶エイド・クリスタルも数個買っておく。

店を出て、掲示板のほうに向かって歩いていく。

と、掲示板の前に二つの人影が見える。

それは立ち話……をしているようには見えなかった。

「先輩！」

二人の人影は互いに武器を交えていた。

「武装、クレイモア！」

ユウトは馴染みの武器を出現させ、二人に駆け寄った。

敵は、両手剣使いだった。フードですっぱりと顔を隠し、体の大きさもコートによって曖昧になっている。

ハルカは槍杖で敵の黒鎌を弾いていた。戦闘能力特化型の魔術師故、白兵戦もこなせるのは彼女の強みだろう。その分純粋な魔術では他の魔術師プレーヤーには劣るが。

敵はユウトに気がつき、一歩大きく引いた。

「……」

敵は、しばし無言の後、建物の屋根にジャンプし駆け出す。

「待て！」

二人はその後を追った。

…

ミラージュワールドでは、普通のRPG同様に、ステータスというものが数値化されている。レベルアップすると各項目の数値が上がるっていく。

そして、ミラージュワールドには『逃走』というステータス項目は存在しない。だが、敵の逃走能力はユウトたちのそれを大きく超えていた。

巧みに建物から建物に乗り移り、僅か5分あまりで見失ってしまったのだ。

「噂にたがわなぬ……といったところですか」

おそらく今のが『閃光ジャック』だろう。

「ジャックって言うのはちょい間違いね。だって使ってるのでっかい鎌だったじゃない。ありや処刑人、って感じよ」

「そうですね……。見たところ、スピード、ジャンプ力、そして鎌を振りますパワー。すべてにおいて長けていた。あれはレベル30どころかレベル40、という可能性もありますね」

「さっさと解決しないとね」

…

プレイヤーキラー(2)

昼休みの放送室には、砂糖の甘い香りが漂っていた。

「うわぁ……本格的……」

「でしょでしょ？ 食べて食べて」

優斗は、巴からフォークを手渡される。

「……うわ、これおいしい」

「ホント？ 良かったー」

巴の喜びの言葉に、優斗も自然と笑みがこぼれる。

「三矢さんさすが」

「へへ……」

優斗は一切れ目を食べ終わり、二切れ目に手を出した。

「……ねえ、優斗君」

「ん？」

「優斗君ってさ、仲いい先輩がいたじゃない」

「先輩？ ああ、中北先輩のこと？」

「そう。中北先輩って、弓道部、ってわけじゃないよね？」

「うん。実は同じネットゲームやってて、そこで知り合ったんだ」

ほとんど本当のことだ。嘘なのは『ネット』という部分だけ。

「そっか」

巴はしばらく黙り込んだ。

そして、ふと「あ」と言っ、優斗の顔に指を伸ばした。その指は唇の横をなぞる。

「付いてたよ？」

「どうやら、口元に付いたパイの欠片を取ってくれたらしいが……」

「……あ、その……ありがとう」

その行動に恥ずかしさを隠せない優斗。

「優斗君可愛い」

「いや、その……」

優斗のは顔は、モモを通り越してリンゴになっていた。

…

数日後。

いつものようにミラージュワールドにログインする。

ギルドリーダー、ハルカの兄ソウヤから出された指令は、C地区の見回り。といってもギルドメンバーはユウトとハルカの2人しかないなので、見回れる範囲は限られているが。

発生しているモンスターを倒しつつ、街を歩いていく。

スクエア以外の通常フィールドには、普段からほとんど人が居ないが、最近は『ほとんど』ではなく『まったく』人がいない。

「なんか……寂しいかも」

これは決して他のプレイヤーがいないことに、ではなく、一人フィールドを歩いていることに対してだ。

ここ半年、常にハルカとパーティを組んでいたため、ソロ行動は久しぶりだ。

ただ、この寂しさも悪くはない。適度な孤独も人間には必要だ。そんなことを考えていると、突然。

「うわぁ!!!!!!!!!!!!!!」

突然の叫び声。

「なんだ!?!」

ユウトは音の下方方向に向かって駆け出した。

「武装、クレイモア」

瞬時に手に剣が握られる。

角を曲がると、人影が見えた。

大きな鎌に、黒いコート。間違いない。数日前にハルカを襲ったプレイヤーキラーだ。

だが、昨日とは違う点が一つだけある。

今日はフードをしていなかった。

プレイヤーキラーが振り返る。

人影——いや彼女の顔には見覚えがあった。

「……ミツヤさん!？」

その顔は間違いなく、トモエのものだった。

3・巴の告白

「ユウト……くん」

トモエは鎌の刃を地面に下ろし、ユウトを呆然と見つめた。

足元には、装備品一式と結晶。クリスタル

この状況——床に装備品と所持アイテムが転がる現象は、プレイヤーが死んだ場合に起こる。

「まさかミツヤさんが閃光ジャック？」

「……」

目を反らすトモエ。しばらくの沈黙。そしてその目が再びユウトに向けられる。

「ええ、そうよ」

「な……」

「驚いた？」

無表情のままそういうトモエ。

「そんな……だって、ミツヤさんがプレイヤーだなんて……」

「半年前。突然この世界に来了。そして説明書ガイドブックを読み、この世界のシステムを知った」

「……ねえユウトくん。正直に答えて。私は悪いことをしてると思う？」

「本当にミツヤさんがPKをしてるの？ なんかの間違い」

「間違いじゃないわ。もう何人も殺してる」

「……」

「ねえ、PKって駄目なこと？ 何か悪い？ だって、別にここで死んでも、死ぬわけじゃないのよ？」

「だけど……」

「MMORPGって本来そういうものでしょ？ 一定のアイテムをプレイヤー同士で奪い合い、時には殺しあう。それは普通のことだ」

しょ？」

「でも、なんのために」

「お金のために決まってるじゃない」

「……お金？」

「そうよ。いい？ モンスターから稼げるお金なんて限られてる。

モンスターが再出現する^{リポップ}には時間が掛かるから。だからプレイヤー

を襲い、アイテムとデイルを全て奪う。そうすればモンスターを倒すのなんかとは桁違いの利益をえられる。アルバイトするよりもずっと効率がいい。毎日2時間働くだけで1万円以上が手に入るのよ？ 自給50000円よ？」

反論することが出来ないユウト。PK行為が正しくないこととは言い切れないという理由もあったが、一番の理由は相手がトモエだということだった。

「でも……この世界でも、殺されれば痛いんだ……」

「……そうね。でも私だって痛かったのよ！」

突然、目に涙を浮かべるトモエ。

「ミツヤ……さん？」

「他人に無理されるのってすごい痛いんだよ！？ 口やあそこに汚いものを吐き出されるの！ 血だって出た。痛かったのよ！！」

「ミツヤさん、まさか……」

「お父さん借金まみれだったの。それでね、ホテルに連れて行かれた。そこには中年の男が居たの。いつのまにかお父さんは居なかった。その後どうなったかは分かるでしょ？ 信じられる！？ お父さんは私の体売ってお金にしたのよ！？」

ぽたぽたと地面に落ちる涙。

「痛い！ 痛かったのよ！ 痛かったの！ 痛かったのよ！」

泣き崩れるトモエ。

ユウトには何もかもが信じられなかった。

…

ユウトは、トモエを近くのセーブポイントまで送り、ログアウトした。

当然眠れるはずも無かった。

いつも笑顔で、優しい三矢さんにそんなことがあったなんて信じられなかった。

巴の告白(2)

次の日。学校には巴の姿は無かった。

優斗自身も気持ち悪くなり、1時間目が終わったあと保健室に行き、早退の手続きを取った

帰り道。

「そういえば……三矢さん、家ここって言ってたっけ」

小さな一軒家。表札を見ると『野口』と書かれていた。

気がつけば、優斗の指は呼び鈴を鳴らしていた。

「……はい」

巴が出てくる。

「あ、その俺。優斗」

「……優斗くん？」

小さな呟くような声がインターフォン越しに聞こえる。

「その大丈夫？」

「……」

大丈夫なわけが無かった。

「……優斗くん。上がってくれる？」

「え？」

「大丈夫。誰も居ないから」

「あ、うん……」

数十秒後、玄関の扉が開く。

そこにはパジャマ姿の三矢が居た。

「学校は？」

「……なんか気持ち悪くて早退してきた」

「そっか」

リビングに案内される。

「……優斗くん」

優斗の目をじっと見つめる巴。

そして、次の瞬間、優斗と巴の距離がゼロになった。
唇に柔らかな感触。それは紛れもなく、巴の唇だった。
数秒後、巴が唇を離す。

「三矢さん……」

「優斗くんが——ずっと好きでした」

何と返事をしていいのかわからず、黙り込む優斗。

「優斗くんは……私のこと嫌い？」

「え？」

「巴が嫌い？」

「……いや、そんなことは……」

突然、彼女の手が、優斗の腰に回され、ぎゅっと抱きしめられる。
柔らかな感触と甘い匂い。

それが優斗をますます混乱させた。

そして、優斗は無意識に巴の手を振り払った。

「優斗……くん」

「……三矢さん……その、嫌いじゃない……むしろ好きだけど……
俺は……」

と、突然巴の顔が無表情な顔になる。

「……ハルカ先輩のことが好き？」

「……」

その沈黙を、肯定と受け止めた巴は、大人しく手を下ろした。

「そっか……」

「その……ごめん」

「いいの。そうよね。仲いいもんね、先輩と。でもね。問題ないわ。
だって——」

巴は、後ろを向いて言った。

その言葉は、冷たい氷柱のようだった。

——だって、優斗くんを殺せば忘れてくれるでしょ」

4・壊れた少女

「こ、殺すって……」

「ミラーワールドで死ぬと、プレーヤーの資格を奪われ、ミラージユワールドに関する記憶を全て失う」

「先輩との思い出も忘れるでしょ？ 人殺しの私も忘れてくれる。」

……全部上手いく」

リビングの出口に向かう三矢さん。

「じゃあね。優斗くん」

そう言って彼女は2階へと上がっていった。

…

夜。

いつものように、優斗はランニングを装って家を出た。だが、ログインするべきかどうか迷った。

本気……だとは考えたくないが、三矢が襲ってくるかもしれないからだ。

迷った結果、先輩に電話をしたのだが、ログイン済みなのか、繋がらなかった。

「行くしかないか……」

もし先輩と三矢が出会ったりしたら、先輩が危ない。

先輩は戦闘能力に長けるといっても、それはあくまで、魔術師としてはのレベルだ。

同レベルかそれ以上の剣士相手に個人戦では話にならない。まして『閃光』の異名を持つ三矢を相手にさせるわけには行かなかった。
「ログイン。プレーヤーネームユウト」

…

ログインしてすぐ、メニューを開き、転移を選択する。

「転移、スクエア」

次の瞬間にはスクエアの転移ポイントに姿を現す。

いつも待ち合わせをしているアイテムショップに向かう。

だが、そこには先輩の姿は無かった。今日は待ち合わせをしていないので当然だろう。

ユウトはアイテムメニューを開いて、ボイスメールを使用した。

「先輩。閃光ジャックが先輩を狙うかもしれないので、これを聞いたら変身をください」

録音完了ボタンを押し、送信する。メニューに送信完了のアイコンが表示された。

ユウトがメニューを閉じたとき、突然後方から声がした。

「こんばんは。ユウトくん」

両手剣を片手で構えるトモエ。

「ミツヤさん……」

「ユウトくん。痛いかもしれないけど、ゲームオーバーになれば、痛かったって記憶も無くなるから安心してね」

トモエは、そういうながら僅かに剣と右足を後ろに引いた。

「ミツヤさん！」

トモエは走り出した。一直線に向かってくる。

「武装、クレイモア」

振り上げられた両手剣を咄嗟にクレイモアで受け止めた。剣と剣がぶつかり、鈍い音をあげる。

ユウトの剣は、名前こそ両手剣の名前だが、両手剣ではない。すこし大き目の片手剣だ。

片手剣と両手剣がぶつかり合えば、力では勝ち目が無い。

だからと言って、反撃するわけにも行かない。となれば取るべき行動は一つだけだ。

ユウトは両手剣を懇親の力で弾き、そのままの勢いで走り出した。

目標は百メートルほど離れた場所にあるセーブポイント。

ユウトの目的を察したトモエは、すぐさまユウトを追撃した。

「ミツヤさん、やめて！」

そう叫ぶが、剣は止まらない。

「秘奥義——」

と、次の瞬間そんな単語が聞こえた。

「——白兵の一閃『ハンド・トウ・ハンド・ストライク』！」

トモエの剣が白く光る。

振り下ろされた剣を、ユウトは咄嗟にクレイモアで防いだ。

だが、次の瞬間。

白兵の剣は、高地人剣を砕き、そのままトモエの体に降り落ちた。

「ああ……！！！」

大きく弾き飛ばされ、ユウトのHPゲージは3割以下になった。

「な……なんだよ今の……」

「武器と装備の耐久値分HPが残っちゃったか——」

「ミツヤ——お前——」

ミツヤは剣を降ろし、地面に倒れこんでいるユウトを見下げた。

「私はね。これ以外のスキル一つも覚えてないんだ。ある一つだけに特化した剣士。相手を一撃で殺すことだけに特化した戦士なの」

「一撃——で？」

「そう。剣で防がれなかったら今頃ユウトくんは死んでいたはずよ。」

——ああ。私なんて奇襲を仕掛けなかったんだろ。そうすれば全て片が付いていたのに」

トモエはもう一度剣を構えた。

壊れた少女(2)

「次？ まさか……秘奥義を連発できるのか？」

「私はね。特別な。1日に2回使えるの——今度こそ終わりよ。白兵の——」

この一撃を食らえば死ぬ——。そうしたら——この2年のことを全て忘れてしまう！

「秘奥義——」

ユウトは立ち上がり、手を前に向けた。

「一閃！」

白く光る刃。

「咲き乱れる白扇の薔薇『ヘブンズ・ウォール』！」

ユウトの手の先が光る。そこから現れる無数の蔓。それらは5つの方向に扇情に広がり、次の瞬間には光の花弁となる。

光の盾に振り下ろされた白兵の一閃は、力を失い、トモエは大きく弾き飛ばされた。

「う……」

地面に叩きつけられて、僅かに減少するトモエのHP。

咲き乱れる白扇の薔薇。ユウトの3種の秘奥義のうちの1つだ。

この秘奥義は、もうひとつの秘奥義とセットになっていて、どちらかを1日に1回だけ使える。

多くの秘奥義『1日に1回』という条件をもっていることから察するに、これがユウトの本来の秘奥義なのだろう。

「——最初から秘奥義を覚えていただけじゃなく、複数の秘奥義を持っているのね」

トモエは立ち上がって、再び剣を構えた。

剣の耐久値は毎日武器屋で回復していたので、まさか折れるなどと思っではいなかった。故に替えなど用意していない。

一応弓ならあるが、弓の耐久値など知れている。まして彼女は一

撃必殺のパワータイプ。数発持てば良いほうだろう。

「それでも。武器も無く秘奥義も使用済み。もう勝ち目は無いでしょ？ 私もあなたを殺したくは無い。お願いだから、D・Cダ・カーポして」
DC。『データクリア』の略で、プレーヤーによっては、D・C——ダ・カーポと呼んでいる。自身をミラージュワールドから消去する。自殺コマンドだ。

「そんな……こと……」

ユウトは弓を取り出して、構えた。

もし、DCしたら、ミラージュワールドに関する記憶を失ってしまふ。

先輩と過ごした半年が無かったことになる。

そんなこと……

「できるかぁ！」

弓が青白く光る。

そうだ。まだできることはある。

「新星の射手（レディアント・アーチャー）——！」

徐々に減っていくHPゲージ。命を光に変換して——放たれた矢はまっすぐトモエに中り、彼女を吹き飛ばした。

トモエの体は建物の壁に打ち付けられ、そのHPゲージは4割強減少した。

HPゲージを一気に消耗したせいか、脱力感に襲われる。

なんとか持ち直し、トモエの方を見ると——。

彼女の眼には涙が浮かんでいた。

5 少女の復唱

剣はその手から零れ落ち、ただ下を向いて泣く少女。

それを見たユウトは、危険だという考えが浮かばず、トモエに近寄った。

「ミツヤさん——」

「私、ユウト君のことが好きなのに——。やっぱりユウト君は——

——先輩が好きなんだね」

涙し嗚咽しながら、紡ぎだされた言葉にユウトも胸が詰まるのを感じた。

「ミラージュワールドの記憶を失ったくらいじゃ……私には振り向いてくれない」

彼女の言うとおりだった。

俺は。

結城ユウトは。

中北ハルカのこと好きなんだ。

「私、馬鹿だったね。さっきの一撃で目が覚めた……」

トモエがゆっくりと立ち上がる。

そして、そのままユウトに抱きついた。背中に回された腕はユウトを強く締め付けた。

どうしてよいか分からず、ただその場に立ち尽くすユウト。

それから10秒ほどして、彼女を慰めようと、手を髪の毛に回して、その頭を優しく撫でた。

「ミツヤさん……」

ここで好きだと言ってあげられたら、どれだけか救われるか。好きだといえば、今この瞬間は、楽になる。

でも、それはできない。

だから、彼女をこの瞬間だけは抱きしめてあげる事にした。

…

それからどれだけの時間がたっただろうか。

ようやく落ち着いてきたころ、トモエは突然ユウト腕を解いた。

そして、おもむろにメニューを開き、ボタンを押していく。エクストラメニューの一番下。普段は絶対に押さないボタンに手が伸びる。

「——ミツヤさん!？」

その手を止めようとするが、その前にそのボタンは押された。

徐々に減っていくHPゲージ。

彼女が押したのはDCコマンドだった。

「いろいろとごめんなさい。ユウト君に迷惑かけた」

「ミツヤさん……」

「ええつとね。ここの記憶がなくなったら、多分また……」

彼女のHPゲージはゼロの値を示した。

そして、彼女の体は光に変換され、ミツヤトモエというアバダーはミラージュワールドから姿を消した。

…

次の日。

学校には全てを忘れた三矢さんが居た。

「優斗君、おはよう」

「うん……おはよう」

一緒に放送当番をこなした。

今日は当番期間の最終日。

無邪気に笑うその顔を見ると、胸が詰まるのを感じた。一体彼女はどれだけのものを背負っているのか。それを考えるとますます苦しい。

今日の放送の終了を告げる。

「ねえ……ユウト君」

「……何？ ミツヤさん」

「私は——」

彼女からゆっくりと、あのときの言葉が繰り返された。

優斗くんのが——ずっと好きでした」

5 少女の復唱（後書き）

いや――。

なんとかミラージュワールド2の連載を終了することが出来ました。

あとがきは明日投稿したいと思います。

あとがき。

こんにちは。

姫反アロです。

MW2。アバウト二十日の連載期間ということ。

MW1の時より少し長いです。

MWの時は連載期間中ずっと書いてたんですが、今回は別のものも同時進行で書いていました。

ところで、すこし小話を。

友達Aの体験談で、友達の友達Bの発言がなかなかだったので。

A「すげえこと発見したんだけど」

B「ん？」

A「俺た学年って酉年と申年しか居ないんだぜ！」

ちなみに、Aは高校2年生です。

今頃！？って感じですよね。

あと、ちょっと恥ずかしいことが。

自分『カタルシス』のことを『カルタシス』って読んでたんですね。

友達との会話でなぜか会話が噛み合わない。間違いが分かったときはあせりました。

おっと、MWに話を戻しましょう。

書きたいことがいくつか。

このMW。ここまで来て、まだ、設定が決まりきってなかったり。

そのため、数多くの不明点があります。

その辺は、リニョール版で、修正したいと思っていたり。

後、さっきのカタルシス。この作品にないものの一つかなと。

この作品では『努力』という部分はほとんどクローズアップされていません。

事件だけを追っています。

というか、主人公の努力を描くのが苦手だったり。

これは問題なので、いつかは書けるようになりたいですね。

後、長い説明文が嫌いで、なるべく避けた結果、必要な情報が書かれていない、というのも自分の弱点だったり。

とにかく問題だらけの姫反ですが、日々努力していきたいと思います。

それから今後の予定。

一応、MW3の構想に入っています。

今回はミラージュワールドを離れて、現実世界でのお話、優斗と晴佳の恋愛模様の中篇を書こうと思っています。

そして、MW4では、MW1で登場したアリスが再登場します。

一応、MW4が完結編になる予定です。

最後に。

最近、コメントのいくつかいただきました。

改善点を教えてくれた人、感想を述べてくれた人。

どちらも執筆に拍車をかけました。

本当にありがとうございました。

ここまで読んでくれた皆さん、本当にありがとうございます。
そして、機会があればまたお願いします。

では。

09/7/18 (Sat) 姫反アロ/Rain Coat

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2941h/>

ミラージュ・ワールド（2） 狂花のハーツ

2010年10月11日23時38分発行